

2025年3月15日（土）

老球の細道 858号

春よ来い、早く来い！

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

「うららかな春は厳しい冬のあとから来る。かわいいフキノトウは霜の下で用意された」。この時期になるといつも思い出す作家宮本百合子の有名な言葉である。私は現役コーチ時代、寒くて練習環境が厳しくなり、高校入試や卒業式などで体育館の使用や練習時間の制限が厳しくなる時期に、できるだけ練習時間を確保し、努力の継続を維持するためにこの言葉を胸に刻んだ。そのせいか、選手達は厳寒の冬を乗り越え、うららかな春を迎える頃になると一皮むけて大きく成長していることが多かった。

先日、孫たちとまだ雪の残るあいづ体育館の屋外コートでシュート練習をして来た。大雪の後だったので誰もいなくて2つのゴールを孫2人で占有することができた。コートは雪と雪解けでぬれていたが、シュートには影響なかったので孫たちは喜んで打っていた。

今まで孫たちの試合を見ていて、ボールをもらってもパスばかり考え、シュートをしない姿にいらついていた私は、練習に行く時、思わず言っただけいけない言葉を吐いてしまった。「試合中にシュートをしないのだからシュート練習などする必要はないのではないか」。運よく、わが孫は私の言っていることを聞いてなかったもので、2人で兄弟けんかをしながらシュートを打ち続けた。私はひたすらボール拾い、そして爺の仕事「必殺ほめ殺し」に徹した。

「人を創るということは自信を与えることです。その人のいいところを見つけてほめてあげることです」〈松下幸之助〉

練習後、あいづ体育館をのぞいたら、ある高校のバスケット部員数名が個人練習に励んでいた。個人で体育館を借用し、個人練習に励む努力は、もうすぐ来るうららかな春の季節にたくましく成長した姿を見せてくれるだろう。また、「ふれあい体育館」においても、わが孫たちの「城北、行仁ミニバス」チームが練習している隣のコートで、平日の夜間にもかかわらず、小学生と中学生2人の兄弟が親の同席の下で個人練習に励んでいた。

努力の継続は難しい。努力はどれだけ重ねれば、いつ実を結ぶかといった具合に数量的な計測ができない。努力を継続してもスランプになったり、伸び悩んだりして報われないことも時にはある。そんな紆余曲折を経ながら長い間の努力の積み重ねがあつて、ある日、ある時突然に飛躍が生まれる。花開く瞬間まで、努力を惜しまなかった者だけが、飛躍の喜びを味わう資格がある。そこに努力の難しさと素晴らしさがある。

「くつろぎとなった努力が本当の努力である」

才能がありながらダメになる選手がいる。思いもかけないところで良い結果を出す。しかし「ここぞ」と言うときに好結果を出せない。努力に裏付けられた好結果ではなく、才能による好結果に気を良くして努力することを忘れる。やがて自分のなすべき技を見失ってダメになってしまう。歌を忘れたカナリアと努力を忘れたアスリートに明日はない。

春には桜だけでなく、選手達の努力の大輪の花が見れる。春よ、早く来い。